

書評

高本康子『近代日本におけるチベット像の形成と展開』

槻木 端生

チベットと聞くと恐らく多くの人は、他の地域に比べてどこか地味な感じがあったり、あるいは違和感を持っているかもしれない。こうした感覚はこれまでのアジアへの視点、あるいは近現代史研究のある種の偏りが生み出したものであろう。現代に生きている私たちは自分自身の視点の偏りにどのように取り組むか、それが歴史研究本来の課題であるはずである。しかしこれはなかなか難しいことでもある。本書は私たちの視点の偏りを、事実を積み上げながら読み解こうとしている。各章の構成は以下の通りである。

序章 日本人とチベット

第1章 日本人入蔵以前のチベット・イメージ

第2章 河口慧海『西藏旅行記』の登場

第3章 大正期におけるチベットへの関心と青木文教『西藏遊記』

第4章 第二次世界大戦までのチベット・イメージ

終章 日本における「チベット」

日本人にとってチベットは、単に中央アジアの一地域を意味している訳ではない。日本人にとってのチベット像の歴史は、日本人のアジア観、あるいは世界観の歴史である。この点はこれまで十分に追求されてこなかっただけに本書は非常に困難な課題を抱えている。そのために本書の意味を読み解くことはなかなか難しい。そこで今理解している範囲内で、本書を日本の歴史、アジア地域への意識の中に位置づけながら読む努力をしたい。

1. 日本人にとってのチベットへの接近

日本人の持つ世界観の歴史をたどってみると、日本人の世界観やアジア観を作り出すためには、チベットと呼ばれる地域が重要な役割を果たしていることが分かる。その点で近現代のアジアへの視点を見直すために、本書は一步を踏み出したと考えている。

日本の伝説では東の海の底に竜宮城があるという。また中国の伝説でも東海の中に蓬莱という島があるという。どちらも日本や中国に住む人々の理想郷である。人間は遠くの土地に夢を持ち、それを自分の生活と結び付けて世界観を創り出してきた。

かつて日本人の夢の一つに「天竺」があった。それは日本最古の世界図といわれる『五天竺図』が残されていることから分かる。また1749年の『天竺之図』の端には

「大唐国」があるが、さらにその北の海上に小さく日本列島が描かれている。この図は「天竺」が日本人の夢の一つであるとともに、日本列島と東アジアが結びついているという意識を示している。石川流宣の『万国総界図』（1688年）でも、海の向こうに「大清国」があり、その向こうに「天竺」がある。「日本人の伝統的世界観は、仏教の教義に基づくいわゆる三国世界（日本、中国、インド）である」⁽¹⁾と言われる。日本の地図は「天竺」から「三国世界」へ広がり、日本列島の生活とつながって行く。こうしたアジアに生きる日本人の世界観を見てくると、「天竺」と結びついているチベットという地域は、その意味で重要である。

欧米の地図の影響を受けて、18世紀から19世紀に日本でも多くのアジア地図が作られる。しかしそこには国境線で囲まれた「領土」と、国境線が描かれていない「地域」があった。かつて中国大陸には「大唐国」や「大清国」の「領土」があったのに、日本海の対岸の東北アジア「地域」には、タタール（タルタリエ、韃靼）を始めとするいろいろな民族の名前が記入されているだけで、そこには「領土」はなかった。

もともと「地域」と「領土」という概念は固定されたものではない。住民の世界観が変われば「地域」は変わるし、権力が変われば「領土」も変わる。しかし「近代国家の領土」は人工的に設定されたものだけに、生活や文化と結びついた「地域」や地域権力から生まれた「領土」の概念とは、一見重なるように見えながらも、その性格は大きく違う。

本書は、19世紀から20世紀にかけて東アジアで成立した「近代国家の領土」が、それまでの日本人の歴史から生み出された「地域」や「領土」と絡み合いながら展開する姿を、チベットという「地域」を通して検討しようとしている。その意味でもユニークな視点を持っている。

2. 宗教関係資料について

チベットという地名がいつから日本に伝わったのか、はっきりしたことは分らない。しかし少なくとも1810年の高橋景保『新訂万国全図』には、「図伯特（ツベテ）」というチベットを示す名が書き込まれている。少なくともこの時にはチベットが、夢や宗教の世界のものではなく、具体的な地域として現われてきたことを示している。

チベットは宗教を通して日本人に意識されてきた。そのこともあるのだろう。明治の開国以来、数人の宗教者がチベットへ出掛けて、大量のチベット情報を日本へ持ち込んだ。本書はその過程を、東西本願寺の布教活動や、河口慧海、青木文教などの僧侶の活動を中心にして詳細に検討している。

戦後の東アジア研究のなかには、原資料に当たらないままに二次資料、三次資料で論ずるものがしばしばある。しかし本書では、できるかぎり原資料に当たろうとしている。しかし宗教関係の資料には、大量に残っているのに未だに整理ができていなかったり、いろいろな理由から非公開となっているものも多い。さらに資料の内容についても、書かれている内容については簡単に裏付けを取れないものが多い。原資料に当たって裏づけをとるのが当たり前とえばそのとおりであるが、そう簡単には行かな

い。本書で引用された資料を見ると、資料と取り組む著者の苦勞がよく分かる。

3. 日本の「近代国家」成立とチベット

幕末に欧米から日本に伝えられたチベット情報や仏教関係情報から、著者が指摘するように僧侶の間に「入蔵熱」が生まれてくる。しかし漢訳仏典よりも「より原典に近い」仏教書を入手しようとする姿勢は、間もなく実際のチベットの姿を探ろうとする「探険」（調査）への志向と重なってくる。なぜ「探険」（調査）なのだろうか。それはそれまでの「天竺」への夢よりも、現実のチベットを知る必要があったからである。

明治政府が目指したのは、「近代国家」を組織することであった。この「近代国家」の目的は、多文化、多民族が住む地域に人工的に国境線を引き、国境線の内は一つの民族である、あるいは一つの国民であるという意識を作り出すことにあった。そして「国民」には共通の言語（標準語）、共通の文化、共通の象徴（歴史あるいは首長など）を受け入れるよう求めた。そのために国境の中では、原則として多様さを認めなかった。こうした施策はどのような「近代国家」でも見られるものである。

幕末の政治を動かそうとしていた人たちの意識には、このままではいずれ日本列島も分割され、ロシア、イギリス、フランスなどの先進「近代国家」に占領される恐れがあった。そこで日本列島の周辺に国境を作り、その中に住む人々の心に「同じ日本人」という意識を作り上げようとした。その時に重要な機関として出てきたのが「近代学校」であり、大きな役割を期待されたのが近代の宗教教団であった。

明治前半期、国境をどこに設定するのかは大きな課題であった。その点では笹森儀助などの仕事も重要であった⁽²⁾。しかし国境は「内地」を設定するだけでは済まない。「内地」を意識するには「外地」を明確に知らなければならない。そこで数多くの「探検」や「調査」が必要になった。チベットだけではない。明治以来、北はシベリアから南は東南アジアまで、多くの「探検」や「調査」が行われた。「入蔵熱」はその一部であった。

しかも「入蔵熱」は宗教教団だけではなかった。その傍らには常にある種の軍関係者が動いていた。軍は「近代国家」の権力の象徴であったから、「近代国家」の軍と宗教が共に行動するのは自然なことであった。もちろんこうした軍と宗教の結びつきは日本だけではない。欧米「近代国家」も多くのミッションを派遣している⁽³⁾。

4. チベットをどのように見るか

1876年の谷了然『滞在支那記』⁽⁴⁾を見ると、1877年に谷は上海に寺院を開設できるように日本の領事館に願いを出している。それだけでなく居留民のために医者を出し、学校を設置することを願っている。幕末、あるいはそれ以前から既に多くの日本人が大陸に渡り、そこで生活を展開していた。その居留民に対する活動は布教だけで済むものではない。教団の活動の対象は、居留民の生活全般に広がって行く。日本も「近代国家」を目指すようになると、「内地」に住む人だけでなく、「外地」にいて「内地」と結びつきを持っていると意識している人も束ねなければならない。そこに「外地」布教の問題が出てくる。本書では「近代学校」の教科書を使って、チベットを含

めたアジアの地域がどのように日本人に教育されたかを語っている。「近代学校」でアジアや世界を教育するということは、単なるアジアや世界に関する知識を教育するのではなく、人工的な国境線を越えて「内地」へ入ってくる人や、「内地」から「外地」へ移動する人たちも、どのように「国民」として捉えるかという問題であった。

19世紀前後から世界各地で始まる争いは、こうした課題を持つ「近代国家」の争いであった。ある地域を「近代国家」の国境の中に取り込むには、まず軍力で国境を作り出すことが必要である。しかしそれだけで済む問題ではない。最大の仕事はその地域に共通の文化や生活を生み出すことである。その為こそ教育活動や布教活動が有効であった。もちろんそこに住む人々は、単純に「近代国家」の意のままに動くものではない。自分たちの生活を支えるために自分の生活や文化を守ろうとする。チベットにいたチベット人も同様であった。

日本人にとってかつては夢の土地であったチベットは、明治期の日本人僧侶の視点からすれば、自らの生活を守ろうとして外の人を受け入れない「秘密の国」であった。やがて昭和期になると、外国の文化や生活を受け入れないチベットの僧侶は「墮落している」と非難されるようになる。外の人たちが他の地域の文化をどのように非難をしても、それはそれぞれの価値が違うというだけで、どちらの価値が正しいかという問題ではないはずである。しかし日本人僧侶の目には「墮落」と見えたこともそのとおりであろう。

何をもって「墮落」というか、その判断は難しい。「近代国家」という基準からすれば「墮落」かもしれないが、「近代国家」の基準もさまざまな偏りがあり、現実には多くの差別意識を生み出している。本書によれば、日中戦争時代にはチベットの「喇嘛教の腐敗」や「喇嘛僧たちの反政府運動」が「墮落」として非難されたという。こうした非難は「満洲国」の成立や、日本の「満蒙」、「西北」への進出と平行していることを忘れてはならない。そこに僧侶たちがチベットの「墮落」を見つける背景がある。

5. これからの課題

「満洲」という地域名は「中国東北地区」を意味するものではない。地域名としての「満洲」は西欧から生まれ、1800年前後から日本でも使われるようになった。そして日本では、始めは北アジア即ち日本海の対岸を意味していたのに、時代によって範囲が変わり、日本人が大陸を意識することとなる。このことばの意味する範囲は、「満蒙」という言い方からも推察されるように、日露戦争以降に拡大して行く。

この拡大して行く意識の下には、かつてのチベットへのあこがれがある。そしてそれは今日でもシルクロードへのあこがれとしても残っている。またこの拡大を推し進めた力として日本の社会の変化、特に「近代国家」としての日本を作ろうとする意識がある。本書では、「近代学校」の教科書、大陸へ渡った僧侶たちの記録、新聞記事や小説などを使って日本人の心にあったチベットを探っている。おそらく本書のねらいは北アジア、東北アジア、東南アジア、中央アジアなど、日本人のアジア観の将来に繋がって行くものであろう。そしてそのアジア観を作った先頭に軍があり、

それを支える僧侶の活動や「近代学校」の検討も、いずれ著者がぶつかる課題であろう。

誤解のないように言うておくが、軍の仕事の中心は鉄砲を撃つことでもなく、武器を振り回すことでもない。まさに占領地行政こそが最大の課題である。占領地に住む人々に何を伝え、どのように行動する人になってもらうのか、そのことこそ「近代国家」の戦争が抱える最大の課題である。だから武器だけではどうにもならない。戦後のために軍と教団と学校は密接な関係を持たなければならなかった。著者はいずれそうした関係を明らかにしてくれるだろうし、本書はそうした課題をどのように解こうとしたかを探る出発点になるものである。

これは戦争や軍だけの問題ではない。まさに今日の「近代国家」、「近代教育」の課題でもある。

註

- (1) 神戸市立博物館編『古地図セレクション:神戸市立博物館』(神戸市スポーツ教育公社、1994年) 所収「8. うちわ型仏教系世界図」(宝永年間)。
- (2) 青森県立図書館所蔵『笹森儀助関係文書』。
- (3) 例えば金子民雄『ヤングハズバンド伝:激動の中央アジアを駆け抜けた探検家』(白水社、2008年)など参照。
- (4) 諏訪義議語り・大藤〔名前不明〕筆『明治九年より 谷了然師滞在支那記』(同朋大学付属図書館蔵)。

高本康子『近代日本におけるチベット像の形成と展開』(353頁、芙蓉書房出版、2010年2月)

(つきのき みずお: 同朋大学名誉教授)